

地方だより 名瀬測候所

20万郡民の8年間の悲願であった本国復帰が実現してから1年半になる。大島郡は沖縄島北端を指呼の間に見る与論島、町民の寄付によって設立された測候所のある沖永良部島、徳之島大島及び喜界島等の5島からなりたっている。

名瀬は最大の島である大島にあり、人口43,800、U字型の港をひかえ周辺は100~200米の山にかこまれて、V字型に南にのびる密集した人家と狭苦しい道路は戦前と殆んど変りない。忘れ得ない、昭和28年12月25日のあの歓喜と希望も、昨今は復興事業の遅滞と復興費の削減、サラリーマン以外の者は思ったより生活が楽にならぬ、といった理由で1部では琉球政府時代がよかったという声に転じつつあるとか。

しかし本国との交通は自由になった上に、各島には定に汽船が廻航し、各学校の鉄筋校舎も相次いで完成されつつあり、各島の主要港道路の建設改修も進捗し、名瀬港も年内には500トン級の船が岸壁に横づけになる。



写真1 中央の煙突のような白い2本の柱が名瀬名物の当所無線柱(36m)。この附近が当所の位置で敷地1500坪。

このような現状から3年後の大島郡の様相を想像してみても、復帰のよろこびは決して水泡にならないであろう。ましてやわれわれ公務員の最大のよろこびは、新しい制度への切替、人事の交流、各種の研修等によるのである。

さて前おきが長くなったが名瀬測候所も着々と整備拡充され、諸器材及び備品等の補充取替え室内の模様替え、レーウィン観測庁舎の完成等を見て府県区測候所並の仕事をしており総員元気で頑張っている。1957年の国際観測年までには、ゾンデ観測も計画されており、地震観測の復活も近いと思っている。

写真に見える煙突状のものは無線アンテナ支柱で長波時代に岡田先生の御計画のもとに建設されたもので初めての方は誰でも工場の煙突と思うそうである。北側のものは空襲により破壊されたので琉球政府時代に切断修理したので南側のより3米位低くなっている。これと同型のものが石垣島測候所にもあるが、両者とも船舶の入港の際によい目標になるので関係方面では大変ありがたっている。岡田先生の御偉業の一端がうかがえる一例である。

大島の名物の中にハブと酒は人口に膾炙している。気候的には雨の多いこと、台風、冬の季節風等で島民が天気予報を重大な関心をもっていることは想像以上である。

大島のハブは猛毒であるが、山野にゆけば必ずハブ公に出会い又はかまれるというのではない。人口20万の郡民のうち本年1月~6月間にうけた被害者は16人と報じられているから、余程運の悪い人が災難に会うわけである。従ってさほど心配することはない。

酒いゆる泡盛はたんとあって島生活にはなくてはならないものであるが、これについてはいわぬが花であろう。

写真は島田次郎撮影。1955.6.20 (比嘉政雄)

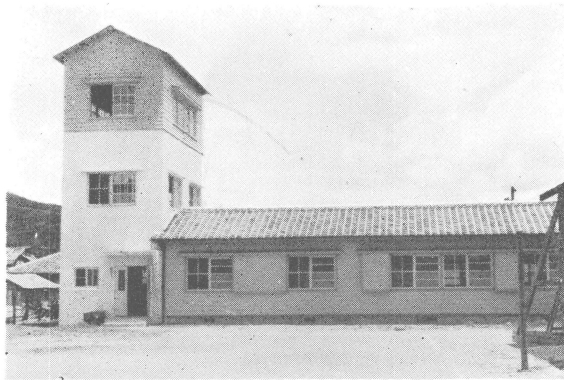


写真2 新築されたレーウインの高層観測3階には等感度レーウイン受信機「R49(改53)」を設置してある。

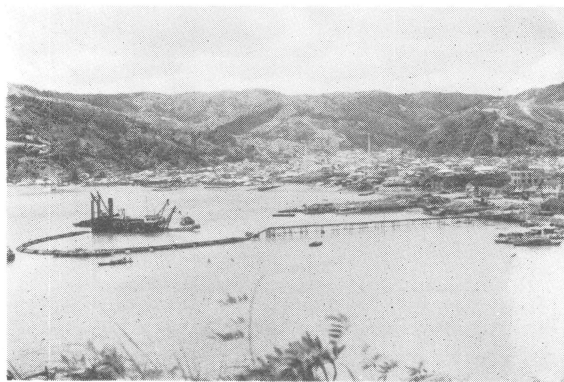


写真3 名瀬港の築港工事。現状では定期船も写真1の位置に碇泊している。